

氏名	ヒラ 平	タ 田	タツ 立	ト 人
学位の種類	博士（美術）			
学位記番号	博美第317号			
学位授与年月日	平成23年3月25日			
学位論文等題目	〈作品〉《Re》： 〈論文〉充滿する社会／周辺の空き地			
論文等審査委員				
（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	佐藤一郎
（論文第1副査）	東京造形大学	教授		有吉徹
（作品第1副査）	東京芸術大学	准教授	（美術学部）	大西博
（副査）	〃	教授	（ 〃 ）	保科豊巳

（論文内容の要旨）

今日、「現実的なもの」の多くは間接的にしか知ることができない。視覚的な情報は絵画に始まり、写真や映像へと発展し、インターネットは既に現実の構造のなかに浸透した。ますます間接的な現実こそが現実を形づくり、あらゆる方向に拡張されている。だが、「現実的なもの」の間接性とは単に知覚的なメディアの発展のみをさしているわけではない。友人の話や、他人同士の会話もまた、「現実的なもの」を、それぞれの形で作りだす。現代における「現実的なもの」の形態は、このような複雑なからみあいのなかから生みだされていると言えるだろう。

このような現実のなかで、絵画の制作者も、単に無媒介で直接的な存在ではあり得ない。制作者本人は、自らが「表現している」と感じていても、それだけではなく、「自分の内部から生まれていない運動」によって制作しているという側面が存在している。これまでも作品とはけっして「無からの創造」ではなかったように、現代の制作者もまた、この時代を反映するような形で世界を媒介し、作品に保存していると考えるべきである。

また、時に制作者の創造の過程には、合理的な思考や判断を超えたものが求められる。作者としての私の視点とは、このような合理的な思考や判断をどのようなプロセスによって超えられるかといったもののだとも言える。そして、それがどこに「潜んでいるのか」を探し出す作業は、身体に語りかけることによって展開される。

本論文では、制作者である私の視点から、主体と客体、身体と精神、自己と他者の関係について考察する。現代においてこうした二元論的な対立概念のペアは、もはや無効化されていると言えよう。しかし、現代の視点に立って、これらの対立概念の関係を語ることは、作品に表れる身体がどのような時代を背景としているかを示唆するだろう。また、芸術作品において身体を考えるとすることは、「人間というもの」が芸術作品にとって何であるのかを考えることと同じ意味を持つと言えるだろう。

本論文は、序章と終章を含む、全四章の構成になっている。

第一章「「現実的なもの」を問うことについて」では、制作者にとって見過ごすことのできない現代社会の変容について論じる。第1節「媒介する主体」では、まずスラヴォイ・ジジェクの論考を手がかりに、主体と客体がもつ役割の転倒について示した。ジジェクは受動的な客体に働きかける能動的な主体という概念を転倒させ、主体を定義するのは、基本的な受動性であるとする。したがって、主体が客体によって形成されるものであるのだとすれば、画家の制作活動とは自ら能動的に「表現する」という側面と、何かを「受動する」という側面、この両者の「間」の関係性のなかで展開されていると考えられ

た。第2節「客観的な形態と主観的感情との「間」の実践」では、ポール・セザンヌやフランシス・ベーコンの制作過程に触れ、画家の受動性や客観性に関わる画家の身体の有様について考察した。その結果、画家とは主体と客体の「間」を媒介することによって作品を生み出していると捉えられた。第3節「リアリティについて」では、芸術家の倫理的な決定の背景をたどりながら、制作者の身振りや痛みをともなうリアリティの重要性について考察した。

第二章「絵画と身体の関係について」では、まず絵画にとって「身体」とはどのような役割が与えられているのかについて考察し、「身体」とは、個人のものであり、他者とは交換不可能な作者の感覚の総体であるとした。また、私たちの身体は生まれたままではなく、構築されたものだということ、そしてそれこそが現代の制作者の感覚を露呈するものであると捉えられた。次に「受動性」という観点から写真家の中平卓馬の活動について考察し、中平の表現活動が、世界のあらゆるものに張り付いた意味を引きはがす行為であり、また、ほんものの現実と嘘の現実を対立項としながらも、そのどちらにも拠らない視点を見いだそうとするものであったことを明らかにした。続いて、私の思考や制作に関する二項対立の概念や運動について触れ、そこで起こる現象を関係性の中に置くことで見えてくる現代の制作者に関わる構造について論じた。

第三章「充満した社会に対する無意味な身振り」では、私自身の制作における試行について論じた。まず、私の作品はパズルのような断片の集積によって形成されており、私が作品や意見を語るということは、世界の像を小さな断片のうちに語ろうとすることであるとした。また、作品とは意図しても意図しなくても、制作者の意見の総体であり、制作者の問題や意見の露出であり、個人の問題や意見としての作品は、小さな断片が集まることでひとつの世界を描き出すだろうと結論した。

第四章「制作の実際」では、制作年代順に私の個々の作品について述べた。私の作品は、そこが世界のどこであるのか、またどのような状況下であるのかを明確には示さない。私が求めているのは、複雑な世界に対する単純な答えとしてのイメージではなく、常に曖昧な回答であるとした。また、イメージそのものは、それ自体に内在する潜在的な可能性を開くことができ、それぞれのうちに孕んでいる物語を展開させていくことになる。それゆえに、人の手や思考によってつくられた作品は、説明できない世界のあり方や、非論理的であっても、現在の世界の感覚はこうなっているという承認をあたえるきっかけを与える可能性を残しているとした。

(博士論文審査結果の要旨)

平田論文は、現代社会のさまざまな変容のなかで、今日の絵画の捉え方と絵画の制作者が認識すべき事柄や態度について、関連する内容の考察と平田本人の制作経験などを通して論究することを目的に書かれたものである。平田論文は、主体と客体や主観性と客観性といった、美術作品の制作者にとって重要かつ根本的な概念やそれらの関係性をめぐる現状について、現代社会の変容にもとづく意識化を通して再整理することに成功している。なかでも、従来のさまざまな対立項の関係が流動化している現代において、それらの対立項を包括するものとして制作者の身体の役割について指摘した論究は、極めて今日的な示唆に富み優れている。また、そうした分析に結びつけて自らの制作の思考を誠実に検証し、論じようとした全体の構成には十分な整合性があり、結果として現代の制作者の思考の実際を詳らかに示すものとして大いに価値が認められる。

論文審査会における平田本人による発表は、論文全体の内容を明確かつ的確に述べるものであった。本人発表後の審査会では、平田論文の本体およびその発表を総合した審査がなされ、複雑な内容について真向から取組み高いレベルから論文が形成されていると、審査員全員から極めて高い評価が得られた。

これらを総合すれば、平田論文は東京藝術大学大学院博士課程の論文として十分な普遍性を有しており、また平田本人の研究能力も十分な段階に達していると評価されよう。

(作品審査結果の要旨)

平田が制作する作品は、発想から作品化にいたるすべてにおいて独自のシステムが構築されている。博士作品として提出された作品は、一見して感覚的風景表現や、対象に対する人間のプリミティブなまでに純粋な恣意的表現と見受けられる。しかし、これらの表層的印象とは裏腹に、非感覚的ともいえる制作プロセスによって発想がイメージ化され絵画化されていく。発想の段階において、発想を構成する物質の選択がおこなわれる。人形や模型、場所をイメージさせる環境をマケットとして制作し、デジタル写真によって記録される。コンピューター上で、複数の写真が統合され、必要となるイメージの要素が合成される。このデジタル画像をもとにした忠実な複製が、絵画材料によって画布の上に定着される。デジタル画像のノイズやモアレ、情報量の不足による不鮮明さは、絵画を構成する重要な要素として捉えられている。

博士作品「Re:」は、過去5年間に於いて制作された作品をインスタレーションとして構築した作品である。再生や繰り返しを意味する「Re:」が示すように、構成する個々の絵画作品、オブジェを、個々のエレメントとして捉えなおし自己の思考を再構築することで、平田という一表現者の表現思考を視覚化する試みであるといえる。個々で成立する作品の個別性を作品から切り離し、インスタレーションの場において「一つの現象」に置き換えることは、論文において論考されている「存在と不在」に由来する。絵画行為において具体化されることを作品と捉え、完成した作品を現象と捉えるならば、自己に現われてくる現象を作品に置き換えることが可能になる。「Re:」において平田自身の現象としての作品群を再構築することで、自己の思考と表現行為の形象化としての場の提示が明らかになる。自己のイメージを構築するための現象として制作されたマケットは、そのマケットからイメージとして絵画化された作品と並列されることで、マケットと絵画が両有するものとしてのイメージを明らかにする。この状況において絵画としての実体、物質としてのマケットの現実性が厳然たる現象として現われ、絵画とマケットの間でイメージは浮遊する。

論文において論考される「周辺の空き地」は、現実を構築する最も重要な要素としての平田自身の思考と表現行為の形象化としての場なのではないのだろうか。

彼の制作姿勢を評価すると共に、博士作品として提出された作品は、平田独自の芸術的世界観を提示するものであり、博士の学位を認めるに相応しい優れたものであるという評価で全員一致した。

(総合審査結果の要旨)

絵画表現という場合、基本的に眼でみえるものをどのように画面に表現するのが、画家の力量であるといわれる。その際の「表現」とは一つには自己表現(Expression)という側面と、再現表現(Representation)という側面を併せ持っていると思われる。平田立人の本論文は、現代社会における自己表現とはどのようなものなのだろうと問いかけることから始まる。社会と個人との接点に着目すると、現代は、マスメディアの発達やインタラクティブな対話ができるコンピュータによる情報通信環境の拡大に曝されている。膨大な情報量の氾濫の中で、自己同一性を探るにしても、身近な直接的体験のみならず、サイバースペース内の間接的体験もおのずと関わってこざるをえない。眼で見るという行為が成立するには、見られるものと間に透明な媒体(メディア)が存在しなければならないと、アリストテレスは述べている。この透明な媒体が電子化され、高度情報化時代といわれる現代社会においては、間接的な体験として個人に働きかけている。このような透明な媒体に取り囲まれた現代を、「充満する社会」と平田立人は規定し、自分自身、あるいはその身近なところにわずかに感じられる空地に着目する。

絵画表現の現場において、自己表現(Expression)を目指すには、自分自身の意識を超えた、すなわち無意識の領域にまで立ち戻る必要を、平田立人は感じている。さまざまな素材(紙粘土、玩具、ペニ

ヤ板、絵具)を組み合わせ、箱庭のようなものを作ってみる。無我夢中で組み立てているうちに、断片にすぎないものが連結し、集積物になってくる。無意識のなせる構造物となり、他者とは交換不可能な作者の感覚の総体が現れ出る。このようなブリコラージュを、デジタルカメラで撮影し、コンピュータに取り込み、再びサイバースペース内でコピー・エンド・ペーストを繰り返し、コラージュしていく。その画像を、カンヴァスに転写し、再び画像を摸写していく。このようなさまざまな媒体を使い、繰り返し制作を続けていくことによって、一つの世界が形成されていく。

いわば、その繰り返しの営為は、再現表現 (Representation) としての表現でもある。しかしながら、平田立人の作品は、そこが世界のどこであるのか、またどのような状況下であるのかを明確には示さない。平田が求めているのは、複雑な世界に対する単純な答えとしてのイメージではなく、常に曖昧な回答である。とはいっても、現在の地球規模で展開している環境問題や政治問題を含む世界に対する「リアルな感覚」をカンヴァスという空地に描こうとしているとはいえないだろうか。

博士論文「充満する社会／周辺の空地」の内容の緻密な論考とその形式の構成に対して、全員の審査委員の評価は高かった。「社会と個人」、「主体と客体」、「身体と精神」、「自己と他者」などの対立項の関係を包括するものとして制作者の身体の役割について指摘した論究は、極めて今日的な示唆に富み優れているとのことであつた。また、自らの制作の思考を誠実に検証し、論じようとした全体の構成にも十分な整合性があり、結果として現代の芸術家の思考の実際を詳らかに示すものとして大いに価値が認められた。

博士作品「Re:」は、インスタレーションとみなされるが、それぞれ単体の作品とみなしてもいいのかもしれない。単体の作品が、再び組み合わせられると、平田立人の人となり、および作品世界が相乗効果により、明確になっていると思われる。箱庭のような模型を作る過程をも指し示す展示方法は、イメージを立体模型化し、それをもとに再びカンヴァスに再現表現する表現行為のありかたそのものの展示でもあつた。

博士論文は、平田立人との制作の背景とその実際を的確に文章化しており、博士作品との密接な関係を語っている。博士課程作品を起点として、今後制作に励み、新たな進展を期待したい。